４４回生スローガン『　異体同心　～　仲間を大切にし、友情を深める～　』

第３学年
学年通信

轍（わだち）

H30. 6. 4
No.１０

長崎平和学習事前学習復習資料

平和学習で長崎市を訪れる者として、知っておくべきことを資料として提供します。これまでの学習の復習になりますが、史実をしっかり把握して現地を訪れることがたいせつですね。No.１０・No.１１を読み込み、長崎市に関する知識を蓄えたうえで被爆者の講演を聞き、平和学習を実のあるものにしていきましょう。

命の尊さ、平和について考えよう。
長崎の平和学習

1945年8月9日の記憶を胸に、平和への祈りを長崎から。

１９４５年（昭和２０）８月９日、午前１１時２分、長崎市の上空で原子爆弾が炸裂しました。瞬時のうちに多数の尊い命が奪われ、想像を絶する打撃を受けた長崎のまち。この悲惨なできごとが二度と繰り返されることのないよう、長崎への旅を機会に、被爆の実相を知り、平和の大切さを学んでみましょう。

1.長崎原爆投下その瞬間　　長崎の町を襲った第2の原爆による悲劇

広島に原爆が投下された３日後の８月９日、長崎は真夏の太陽が照りつける熱い日でした。「ピカッ！……ドーン」目を覆う閃光と強烈な熱線、そして爆風。この瞬間、長崎のまちは死のまちと化したのです。

長崎型原爆：ファットマン

被爆３日後の長崎の町（米軍撮影）

浦上天主堂遺壁

米軍機が投下したビラ

如己堂

2.被爆した長崎のまち　　破壊され、焼き尽くされたまちと人

原爆という突発的な大惨事は、長崎のまちに壊滅的な打撃を与えました。爆心地付近の建物は完全に燃え尽き、瓦礫（がれき）と化しました。人々の体にも熱線は降り注ぎ、通常の火傷では考えられないほどの被害をもたらしました。鉄橋をゆがませ、鉄筋コンクリートの建物さえ押しつぶす爆風が、人々を吹き飛ばし、散弾のような無数のガラスや木片を全身に浴びせたのです。

長崎に投下された原爆のキノコ雲（松田弘道氏撮影）

溶けた６本の瓶

女子学生の弁当箱

◎原爆による被害状況

死　　者	７万３８８４人
負　傷　者	７万４９０９人
り 災 人 員	１２万０８２０人
り 災 戸 数	１万８４０９戸

※当時の長崎市の人口約２４万人

柱時計

長崎放送局より見た長崎市街
（小川虎彦氏撮影）

3.伝え残すあの日の記憶　　今もなお続く原爆の苦しみ

生き残った医師や看護婦らによって救護活動が始まりましたが、器材や薬品の不足で応急処置もままならない状況でした。さらに、原爆の脅威は、被爆時は無傷でもその後、さまざまな症状を呼び起こし、大多数の人を死へと追いやった恐ろしいもの、放射線です。細胞を破壊し、体の奥深くを傷つける放射線による障害の苦しみは、被爆から５０年以上経った今もまだ続いています。長崎のまちには、被爆当時を色濃く残す史跡や遺構が多くあります。これらを見学するなかで、原爆を歴史上の遠いできごととしてではなく、今なお続く苦しみの元凶であり、絶対に二度とあってはならない惨禍だととらえて、原爆の恐ろしさと平和の大切さを感じ取ってください。

この子を残して

この子を残して――
この世をやがて私は去らねばならぬのか！
母のにおいを忘れたゆえ、
せめて父のにおいなりとも、と恋しがり、
私の眠りを見定めてこっそり近寄る
おさな心のいじらしさ。
戦の火に母を奪われ、
父の命はようやく取り止めたものの、
それさえ間もなく失われねばならぬ運命を
この子は知っているのであろうか？

私の体がとうとうこの世から消えた日、
この子は墓から帰って来て、
この部屋のどこかに座り、
誰に向かって、何を訴えるであろうか。
――私の布団を押し入れから引きずり出し、
まだ残っている父のにおいの中に顔をうずめ
まだ生え変わらぬ奥歯をかみしめ、
泣きじゃくりながら、
いつしか父と母と共に遊ぶ夢のわが家に
帰りゆくであろうか？
夕日のかっと射しこんで、
だだっ広くなったその日のこの部屋の
ひっそりとした有様が目に見えるようだ。